

A 7 小児歯科における学習障害児の行動

○緒方克也

福岡市 医療法人発達歯科会
おがた小児歯科医院

学習障害児（LD）は近年、小児神経科や学校教育、児童心理の分野で話題になっている発達障害のひとつであるが、小児歯科領域ではまだ取り上げられてはいない。

学習障害の概念は、1962年の米国のカークとペイトマンによって唱えられ、わが国でも文部省が平成7年に「学習障害児に対する指導について（中間報告）」のなかで定義を明記している。

学習障害の発生率は明確なデータではないが、1クラスに1人か2人は存在するともいわれている。しかし、知的水準が正常範囲内であることも多く、問題行動が個人差内という見方がなされて、学習障害児の特異性が一般にも歯科領域でも理解されてない。そして、ただの恐がりとして強制的治療に頼ることも多い。

今回演者は学習障害もしくはその領域と診断された小学生16名について、歯科的問題点を観察した。その結果、う蝕罹患の傾向や処置について一定の傾向を見いだすことはできなかったが、治療時の行動では治療室や治療器具に対して強い警戒を持つこと、恐怖心がたかまると言語による意思の疎通が維持できなくなることなどがみられた。

A 8 咀嚼時間のはやい小児、おそい小児に関する咀嚼機能および形態学的研究(1)

（鹿大・歯・小児歯）

○岩崎 智憲・森主 宜延

小椋 正

（わかば小児歯科医院・宮崎市）

旭爪 伸二

（堀川歯科医院・鹿児島市）

堀川 清一

目的：これまで、かめないうちの子供についての咀嚼機能および形態に関する研究は行われていない。それは親、教諭、保母らのいう、かめないうちの子供とはどのような子供のことをさすのか漠然としていたためであった。ところが近年、横溝によって咀嚼時間のおそいことがかめないうちの子供と判断される主な要因であることが明らかになった。

そこで、かめないうちの子供の咀嚼機能および形態の特徴をとらえる目的で咀嚼時間のはやい子供、ふつうの子供、おそい子供について比較検討した。

資料および方法：資料は当科を受診した小児、および研究に協力が得られた鹿児島市内の小児で、Hellmanの歯牙年齢ⅡAからⅢBのいわゆる正常咬合者141名（男子71名女子70名）の咀嚼筋筋電図、側貌頭部X線規格写真、歯列模型である。そして対象者を咀嚼時間のはやい子、ふつうの子、おそい子に分け、以下の項目を比較検討した。

- 1) ピーナッツ、マシュマロの咀嚼時間および咀嚼回数
- 2) 筋活動量（1秒間の最大かみしめ時の筋活動量に対する、①咀嚼開始から最終燕下までの筋活動量の割合②咀嚼1秒間あたりの筋活動量の割合③咀嚼1回あたりの筋活動量の割合）
- 3) 咀嚼リズム（長さおよび安定性）
- 4) 顎顔面形態
- 5) 歯列形態

結果および考察：低年齢ほど、咀嚼時間のはやい子は咀嚼1秒あたり、咀嚼1回あたりの筋活動量の割合が大きく咀嚼リズムが安定しており、顎骨が大きい傾向が認められた。逆に、咀嚼時間のおそい子は低年齢ほど、咀嚼1秒あたり、咀嚼1回あたりの筋活動量の割合が小さく咀嚼リズムが不安定で、顎骨が小さい傾向が認められた。

以上の結果から、一般にかめないとされる子供（咀嚼時間がおそい子供）は咀嚼機能および形態の発達が遅れている可能性が示唆された。